

エッセイ

『北郷談』を訪ねて

小田切 明 徳

『北郷談』とは明治初期に岡山県出身の神官・葵川信近が著わしたものであり、江戸末から明治期の動乱にあってキリスト教を始めとする西洋文化の到来により、日本人としてどう対応すべきかを述べたものである。私は同志社大学人文研究所の研究会（「キリスト教社会問題研究」：略称CS）の一員として70年代後半に、このテーマに取り組んだ。CSでは、排耶論をテーマにした「六合雑誌」の研究⁽¹⁾があり、私は進化論・科学史から関わり、J.T.Gulick、S.L.Gulickらの著作を論じた。現段階ではこれに付加することはない。

『北郷談』をテーマに研究発表をしたその論文を振り返ると、葵川信近の奈良時代の経歴調べにおいて誤認があることがわかり、驚き、再考をすることにした。

その経緯に簡単に触れておきたい。このCS研究会で、私には葵川伸近『北郷談』や霊遊『劈邪論』等が割り当てられた。前者は工学部の島尾永康教授（科学史）から論文のありかを教えて頂き、排耶論、劈邪論の文献については杉井六郎先生らから指導をうけた。幕末から明治初期に移入された西洋科学、宗教等に向かいあうのか、混乱期の真ただ中であって神道界でも、廃仏毀釈に揺れ、神社の統廃合が行われていた。葵川が大宮司として活動していた奈良吉野郡の川上神社もしかり。過日、前回報告した論文の再検討にあたり、神道界や奈良の川上神社の再調査で得た見聞を踏まえた報告を行った。前回の報告では、丹生川上神社が3つあるとは知らずに発表した、その誤認を正すことが今回の報告の第1の目的であった。

献紹介された。こうして徳川斉昭の排邪論、破邪論から南溪和上の『新慨十率』（清代中国の書）、哲学書院発行『破邪叢書』等研究会参加の先生方から様々な文献を教えられ、その報告をした。そして今回、取り上げる葵川信近著『北郷談』や井上圓了著『破邪新論』を読み込んで行った。これらの本では地球が球形をしている事や天動説や地動説の真偽を検討するものであった。これは江戸末期と明治初年の人々の科学的認識を知り、それが私の教え子・生徒への自然科学の認識・授業展開のうえでも参考になった。

さて、葵川信近の『北郷談』にそくして、進化論とのかかわりに焦点を当てることにする。この本の存在は科学史研究家の村上陽一郎らから「ダーウィンの名前が邦書に現れた最初の例」として注目されていた。私は同志社における進化論の紹介として、宣教師として京都で活動していた2人のギューリック（ジョン・トマスとシドニー・ルイス）を取り上げた。トマスは巻貝の収集、研究に当たり、isolation(地理的隔離)の概念を導入して、進化論についての独自の見解を展開していた。方や、シドニーは、『新進化論』（博文館）を著わし、学問や文化、宗教の啓発活動で貢献していた。こうして、私は同志社大学人文科学研究所における研究会において、キリスト教を始めとする宗教等の哲学、社会学、歴史学等の各分野の諸先生の薫陶を受けることができた。とりわけ杉井教授からは京大の歴史研究における実証的なスタイルの大切さを学んだことになる。このあたりの経緯について、「同志社社史資料通信寒梅」4号（昭和52年4月15日）に、「同志社と進化論」と題する短文を書いた。

II 「北郷談」のあらましと葵川信近

『北郷談』についての、前回の発表（80年11月21日）は、ダーウィンの名前が最初に現れた本として紹介したものである。これはダーウィニズムを利用した排邪論の1つとされた。作者は丹生川上神社の大宮司の葵川信近であった。

さて、その北郷談の構成を紹介すると、序（6 p）、開闢（9 p）、道二（10 p）、諸神（5 p）、一神（23 p）からなり、この『北郷談』の命名の由来としては「我邦自造化主ノ在ル有リ、、吾レ既ニ己ニ北ニ郷ヒテ常ニ紫薇垣ニ対シ矢テ地位ヲ変セ弗ル也」とした。

この『北郷談』のあらましを紹介する。「序」において、上記の命名の由来を述べた後、本文に入る。「開闢」では、イギリスのウィリアム・スミス（地質学者）やダーウィンを紹介しているが、古事記との類似性を説いている。キリスト教の創世記も紹介し、それらとインドや中国の地球の起源との関わりでの論述がされた。この創世記でアダムとイブやノアの洪水にも触れていた。ところが科学者は、ヒトは類人猿に起源をもちアダムとイブの子孫ではないとする。

「道二」では、「教」と「権」、すなわち仏教とキリスト教が「教」、儒教を「権」として、世界の宗教を説明している。十字教（キリスト教）では聖霊、主（君父）の元に民心を結集しやすい。我邦は教権を包括し、儒教を以って補翼と為す。中国の先王の道は儒教、、西洋の近世に独立教会もある。近頃、我が邦の世勢を視て、造化を祀ると雖もさまざまものを祀るもの、多し。

「諸神」では、我邦では八百万の神となる、その元をたどれば天中主神、西洋では現神論及び諸神論となる。

「一神」：諸神は野蛮または半開の国にある。

以上が『北郷談』のアウトラインである。葵川は直接にダーウィンの著作を読む状況にはなかったが、西周らの著述を通じて知ったと思われる。

Ⅲ 『六合雑誌』と進化論研究会

そこで前述のCSの研究会では、私は神道の「いろは」も知らぬ状態で、奈良の吉野の山中の丹生川上神社に出かけ、研究発表をした。そこには『丹生川上と鳥見霊○・吉野利休』と『丹生上川神社と森口奈良吉翁』が社務所に置かれてい

たので、この2冊の本を求めた。当時の研究会で発表するため、丹生川上神社を訪れた時に社務所で求めたものであった。これまで読めていなかったが、今回2冊とも目に通してみても、私の神道の知識が不足していた事を痛感した。とくに、ベーシックな知識に欠けていたことを反省し、城南宮の宮司の鳥羽重宏からはにわか勉強であったが、明治初年の廃仏毀釈、新しい宗教としてのキリスト教移入等による混乱期の神道の動向について教えて頂くことになった（城南宮宮司・鳥羽重宏「明治初年の神祇行政」、次ページも参照⁽²⁾）。こうした準備をして奈良県の南部の3つの神社の調査、聞き取りに出かけた。

さて、前回の川上神社の訪問で手に入れていた2冊の本のうち後者の森口奈良吉翁の評伝を読むと、彼は父親のケガで家業の林業がなりゆかず、続いて母の病死と不幸が続いた。そこで森口は勉強ができたので、進路として奈良の師範学校を目指し、入学した。その3学年（明治27年）の春にキリスト教に接近した。2年の時、1年先輩に聖公会の信者を紹介され、秋の修学旅行の時、小崎弘道や内村鑑三から激励され、最上級生になった時には、クラスの級友全員向こうに回しての宗教の教義を巡っての大奮闘をした。しかし、こうした信仰上のゆれも収まると彼は明治の体制内に順応していった⁽³⁾。

Ⅳ 前回発表の思いちがいを正すための再調査

丹生川上神社は、前述のように上社、中社、下社の3社があった（1図）。ところが、この3社は、明治の初年には社の統廃合が度々になされていた。これは実際に現地に行って調査しないとわからないと判断した。

- ①上社（川上村迫；望月康麿宮司） ②中社（東吉野村小；日下康寛宮司）
③下社（皆見元久宮司） （宮司の名前はいずれも、2012年現在）

その事前の調べでは、2012年10月8日（日）に上社で、例祭があることを知ったので、まず上社に行くことにした。ところが、大台ヶ原、大峰山の麓は前年来

の水害、土石流の被害が出ていて、山岳道路はそのための補修工事が多く、進路には通行止めの標識が出されていて、度々進路の変更を余儀なくされ、予定通りには進まない。結局、上社の例大祭には間に合わず、上社に着いた時には行事は終わっていた。白馬、黒馬が数頭、下社から祭りの儀式のために連れて来られたというがそのイベントも見られなかった。前頁「明治初年の神祇行政」によると、白馬は雨止めのために、黒馬は雨乞いのために用意された。この地は、日本一降水量が多い。実際に大台ヶ原近くに来て、工事中の表示でストップがかかる現実を目の当たりにしたわけである。ここに住む地の人が水の神様に、雨水のコントロールを祈願することしか術のなかった昔の人びとの気持ちが少しはわかる気がした。京都では貴船神社が同じ様に水の神様を祀っている。歌舞伎の鳴滝の舞台が北山にあるが、同様に、ここにも水神・龍が守護神となっている。丹生川上神社各社では奉納された「水の神」と書かれた青い幟旗が神社の境内に靡いていた。

この地を訪れながら、私の気象や自然災害をはじめとする自然界の認識史を思い返していた。幼い頃の私の気象の認識は、親や近所の大人の影響で、困ったときの神頼みであった。

さて、見聞記の続きである。丹生川上神社に向かってR169号線（図1）を左回り進んでいくと、新しいきれいな神社が立っていた。宮司さんのお話を聞こうとしたが、例大祭の事後処理のために忙しくて、あまり時間を割いていただけなかった。

次に下社へ行くためにR169を走る。その宮司さんは上社の例大祭に出かけ、行事に使う白馬、黒馬を引いて出かけていて留守だった。その日は帰らない、翌日の昼頃に宮司は戻られると、告げられた。やむなく第1日目の予定を終えて宿に戻った。翌日、時間を効果的に利用しようと、まず中社に出かけ、昼までに下社に戻る行程にした。中社は30余年前に行った所だが、切れ切れにしかその記憶がない。神社が作成した当時の写真（購入していた絵葉書）を見ているうちに、この地を訪れたのは桜の頃で吉野山の桜を見たのだったことを想起した。今回こ

ここで日下宮司から中社に残されていた「職員異動調書」を見せていただき、葵川信近の記載を確認することができた。彼の転出先が廣瀬神社であったが、そこは奈良県の法隆寺の近くにあった。下社の宮司の皆見からその住所を教えて頂いた。自宅に帰りその問い合わせに対しての廣瀬神社からの返事では「終戦のごたごたにより書類が混乱して、当時の記録がない」とメールで回答された。ここで、奈良の調査はひと段落。帰って東京の神社本庁に質問の手紙を書いたところ、以下の返事があった。その趣旨は、「詳細は判りませんが、関係資料を同封しますので、宜しくお取り計らひ下さい。平成24年10月20日」であった。同封の資料のコピーには、『神宮教院大成』吉川弘文館（同年7月10日発行）があった。葵川の部分は以下の通りである。

「生没未詳年。小田縣（岡山縣笠岡市）の士族出身。明治6年、大講義の時に『上諭大詔之義』（国立公文書館蔵）を著わす。同7年、丹生川上神社大宮司兼大講義であった時に扶桑派講學堂から『北郷談』を刊行する。明治15年1月、少教正・御用掛を命ぜられ、同17年1月より御用掛より判事に昇進。同21年1月勤解使（判任官）を命ぜられる。本書（『北郷談』）の他に『宇内立国大要』、『神誠の講釈』、『扶桑教』（穴野半原説、葵川伸近編）等の著作がある」

V 岡山での葵川をもとめて

総社市に旧知の性教協の研究会で知りあった福本光子に問い合わせたところ、⁽⁴⁾彼女の甥から幾つかの資料が届いた。総社市の名前からして神社に関係している。そこで、岡山県の地図を見ると、吉備津神社、吉備津彦神社が目飛び込む、北西には出雲の国がある。桃太郎伝説が思い浮かんでくる。さて、その資料は、

①『備前人名大辞典』（臨川書店、s 49年）の495 p

「備中足守藩士、初名は千古、本氏は葵川を冒す。安政の頃、郷を出でて国学を修め、神道学者として知らる。幕末国事に就て藩に建白する所あり。後年

東京に於いて祠管となる。明治詩文稿に神道第一論等の寄稿をみる」

②奈良県立図書情報館所蔵資料のコピー。ここでは、六種の記載があった。ここで、前回、伺った時には、廣瀬神社の調査では「終戦の時の方が、書類を処分されて」ため、不明だったところが、以下のように記された。

「1、葵川伸近廣瀬神社大宮司宣下ニ付通達、教部省 自明治六年至七年 省寮司県往復乃件寺院住職身体伺之件 庶務課 寺社乃部、p 028庶務課1874（奈良県庁文書）

「2、五十六号 一、葵川伸近江藤真澄勉励ニヨリ申立之儀ニ付、（引用者；以下略）

「3、丹生川上神社大宮司葵川伸近の滞在の件、教部大輔、宍戸口、

「4、丹生川上神社大宮司兼大講義葵川伸近ヘノ権少教正兼補宣下ニ付達

「5、八十四号、一、丹生川上神社大宮司葵川信近上京之義ニ付/教部大夫 宍戸口

「6、六十一号、一、同社大宮司葵川信近履歴書可届出達

参考までとして送られた資料に、葵川の明治七年一月一七日付大隈重信宛て⁽⁴⁾の書簡がある（早稲田大学図書館蔵）。

「口演」と題するもので、冒頭に国家の急務につき「前年季に謁見ヲ乞ヒ勅ヲ投スル、七回ニイタル」とあり、葵川は行動的に多方面に働きかけをしている事がわかる。それによると、教育の重要性を説き、「日本ノ学生ハ好ンデ西ヲ模ス、然レモ、、、西人ハ先ズ自国ノ古史政教ヲ識テ而ル後他国ノ事ニ及ブナリ、、（引用者、中略を以降、、、と略す）今、日本ノ学生ハ自国ノ事ヲ記セズシテ独リ他国ヲ記セント欲スル者ハ何ノ心ソヤ、、、ント」。「本邦は天孫降臨ヨリ皇統一系無姓シテ相ヒ承ク故、億兆ノ天祖ニ於ケル造化神ニ於ケルガ如キナリ」そこで全国数千の小学等での教育を進めるべきで、「神官僧侶ヲシテ」説教に当たるべきだと大隈重信に謹言している。葵川の住所は小田県備中足守、で、宿舍の目白台8番地の宿から書を出していた。

VI おわりに

葵川伸近の活動した明治初期の関係者を求めての旅は、城南宮、丹生川上神社、岡山、奈良と続いた。わからないところが多々あった。明治初年は体制の大変革で封建体制が崩れ、様々な分野で大波をかぶり文化、思想、宗教分野も揺れていたのだった。長い鎖国体制下で制限された情報のもとで研究を続けた学者や神官らの当時のインテリ層は新しい西洋からの情報にいち早く接した。葵川伸近もその中のひとりで、彼は平田派の学者を通して、西周らが知った進化論のあれこれやダーウィンの名前を知っていったのであろう。それにしても葵川の名前は神社関係者には、あまり知れ渡らず、科学史関係者や排耶論研究者の中で知られていたのが印象的であった。

この小論提出段階で、次の記事に触発された事を記録してまとめにかえたい。『季論』20号の宮地正人と磯田道史の歴史対談（変革の時代と人）の「近代への転換点を平田学派の西洋技術の受容と『⁽⁶⁾靈能真柱』執筆の過程」を読むと葵川らの神学者などのインテリが激動の幕末から明治維新の中で、欧米からの影響も踏まえて彼らの学問体系の…パラダイムが変更されていったという。その影響が『北郷談』にも残されたのだった。

注

- (1) 『「六合雑誌」の研究』（同志社大学人文科学研究所編、教文館、1984年）、これによると私は9月に報告した。「六合雑誌」の研究会については『キリスト教社会問題研究』の61号にも触れた。
- (2) 鳥羽重宏「明治初年の神祇行政」（2012、9、20）、このレクチャーで明治初年の宗教界の混乱とりわけ、神道の対応について教えて頂いた。
- (3) 葵川も西洋の文化、科学に触れようと努力をしたが森口も同様であった。
- (4) “人間と性”教育研究協議会のこと。

- (5) これは蛇足だが、私のライフワークの1つに山宣（山本宣治）研究がある。大隈重信の所に飛び込んだ葵川と対比して、後の山宣の大隈重信邸での園芸見習いの姿を思いだした。
- (6) 左院の建議の中の「天御中主神をもって開元の造化の主神とす」の葵川らの主張について日本大学生産工学部佐々木聖使が書いた「明治初期における天乃御中主神論」があり、この論文をダウンロードした。その中での葵川信近に関係する部分は以下のとおり。

「天乃御中主神が注目されるようになった第六の理由として、キリスト教の影響がある。国学者達は、十九世紀に入ると西洋の天文学のみならず、キリスト教も新知識として修得し始めた。洋学は、儒教や仏教の空理空論を排撃する知識として利用され、キリスト教の創造神話は『古事記』を傍証するための証拠の一つでもあった。大国隆正や伊能穎則・葵川信近・渡辺重石丸をはじめ平田系の国学者は、安易に天之御中主神とゴットが同体位異名であると主張している。」

これらの佐々木の神道に関する見解は、正直言ってこれまでの私の神学素養では理解しかねるものであった。最後に葵川信近でコンピュータで検索したところヒットしたのが「明治初期における天之御中主神論」（佐々木論文）であった。